

赤いカブトムシ

江戸川乱歩

青空文庫

あるにちよう日のごご、丹下サト子ちゃんたんげと、木村ミドリちゃんきむらと、野崎サユリちゃんのざきの三人が、友だちのところへあそびに行つたかえりに、世田谷区せたがやのさびしい町を、手をつないで歩いていました。三人とも、小学校三年生のなかよしです。

「あらっ。」

サト子ちゃんが、なにを見たのか、ぎよつとしたようにたちどまりました。

ミドリちゃんもサユリちゃんもびっくりして、サト子ちゃんの

見つめている方をながめました。

すると、道のまん中に、みょうなことがおこっていたのです。

むこうのマンホールのでつのふたが、じりり、じりりと、もち上がっているのです。だれか、マンホールの中にいるのでしょうか。マンホールのふたは、すっかりひらいていました。そして、その下から、黒いマントをきた男の人が、ぬうつとあらわれたのです。その人は、つばのひろい、まっ黒なぼうしをかぶり、大きなめがねをかけ、口ひげがぴんと、両方にはね上がっていて、黒い三かくのあごひげをはやしていました。

せいようあくまみたいな、きみのわるい人です。その人は、マンホールからはい出して、じめんにすつくとたち上がると、三人

の方を見て、にやりとわらいました。そして、黒いマントを、こ
うもりのようにひらひらさせながら、むこうの方へ歩いていくの
です。

「あやしい人だわ。ねえ、みんなで、あの人のあとをつけてみま
しょうよ。」

ミドリちゃんが、小さい声でいいました。ミドリちゃんのい
さんの敏夫としおくんは、しようねんたんでいさんいんなので、ミドリ
ちゃんもそういうたんていみたいなのがすきなのです。サト子
ちゃんもサユリちゃんも、ミドリちゃんのいうことは、なんでも
きくくせなので、そのまま三人で、黒マントの男のあとをつけて
いききました。

黒マントは、ひろいはらっぱをとおって、むこうの森の中へは
いつていきます。世田谷区のはずれには、はたけもあれば、森も
あるのです。ひるからですから、もりへはいるのも、おそろしくは
ありません。三人は、こわいもの見たさで、どこまでもあとをつ
けました。

森の中に、一けんのおふりせいようかんがたっていました。

「あらっ、あれはおばけやしきよ。」

「まあ、こわい。どうしましょう。」

そのせいようかんは、むかし、せいよう人がすんでいたのです
が、いまはあきやになっていて、そのへんではおばけやしきとよ
ばれています。

三人は、近くにすんでいるので、それをよく知っていました。

夜、せいようかんの二かいのまどから、赤い人だまが、すうつと出ていったのを見た人があるということでした。また、だれもいないせいようかんの中から、きみのわるい女のなき声がきこえてくるといいうわさもありました。

三人のしようじよがにげ出そうとしていきますと、あつとおどろくようなことがおこりました。

黒マントの男が、せいようかんの外がわを、するするとのぼつていくではありませんか。はしごもないのに、まるでへびのようにのぼつていくと、二かいのまどの中にすがたをけしてしまいました。

三人はぞつとして、いきなりかけ出そうとしましたが、そのとき、せいようかんの方から、けたたましいさけび声がきこえてきました。

それをきくと、三人とも、思わず、うしろをふりむきました。二かいのまどから、白いかおがのぞいていました。そのかおが、きやあつとさけんでいるのです。とおいので、はつきり、わかりませんが、三人とおなじくらいの年ごろの、おかつぱの女の子です。その子が、いまにもころされそうにさけんでいるのです。

「きつと、あの黒マントの男がいじめているんだわ。」
三人とも、おなじことを考えました。

まどの女の子は、なにものかの手からのがれようとして、もが

いていましたが、とうとう、ずるずるとうしろへひっぱられて、まどからきえてしまいました。そのとき、なき声がぱったりとまったのは、男に口をおさえられたからかもしれない。

三人は、むがむちゆうでかけ出しました。そして、近くのめいのうちへかえったのですが、ミドリちゃんは、すぐにこのことをおとうさんと、にいさんの敏夫くんに知らせました。

「おいしいことをしたなあ。ぼくがそこにいれば、きつと手がかりをつかんだのに。」

しようねんたんでいだんいんの敏夫くんが、ざんねんそうにいいました。

ミドリちゃんのおとうさんが、けいさつにでんわをかけたので、

けいかんたちが森の中のせいようかんにかけて、中をしらべ
ましたが、まったくのあきやで、人のかげさえ見えないのでした。
せいようあくまのような黒マントの男は、いったいなにもののでし
ようか。そして、あのかわいそうな女の子は、どうなったのでし
ようか。

2

森の中の、ふるいせいようかんのまどから、小さい女の子が、
たすけをもとめてなきさけんでいた、そのあくる日のこと。

ミドリちゃんのにいさんの木村敏夫くんは、さっそく、このこ

とをしようねんたんでいだんちようの小^こ林^{ばやし}くん^しに知らせましたので、小林だんちようが、木村くんのうちへやつてきました。

そして、ふたりで森の中のせいようかんをたんけんすることになりました。まっぴるまですから、こわいことはありません。でも、ふたりとも、たんでい七つどうぐのかいちゆうでんとうや、きぬ糸のなわばしごや、よぶこのふえなどは、ちゃんとよういしていました。

小林だんちようと木村くんは、うすぐらい森の中をとおつて、おばけやしきのせいようかんのまえにきました。入口のドアをおしてみますと、なんなくひらきました。かぎもかかっていないのです。ふたりは中へはいり、ひろいろうかを、足音をたてないよ

うにしてしのびこんでいきました。

かいちゆうでんとうをてらし、長いあいだかかって、一かいと二かいのぜんぶのへやをしらべましたが、だれもないことがわかりました。まったくのあきやです。

「どうも、このへやがあやしいよ。なぜだかわからないが、そんな気がするんだ。」

一かいのひろいへやにもどったとき、小林くんが、ひとりごとのようにいいました。すると、ちようどそのとき……。

どこからともなく、かすかに、かすかに、

「おじさん、かんにんして。あつ、こわいつ……たすけてえ……

」。

というひめいがきこえてきました。小さい女の子の声のようです。ふたりはぞつとして、たちすくんだまま、かおを見あわせました。

「ゆか下からきこえてきたようだね。」

小林くんが、くびをかしげながらいいました。するとまた、

「あれっ、いけないっ。早くたすけて。」と、かすかな声が……。

「どこかに、かくし戸があるにちがない。どこだろう。」

小林くんは、かいちゆうでんとうをてらして、へやじゆうをさがしました。

そのへやには、大きなだんろがついていて、そのだんろの下がわに、まるいぼつちが、ずつとならんでいます。かざりのちよう

こくです。小林くんは、そのぼつちを一つ一つ、ゆびでおしてみました。すると、右から七ばんめのぼつちが、ちようどベルのおしボタンのように、うごくことがわかったのです。小林くんは、それをぐつとおしてみました。すると……。

ガタンという音といっしよに、「あつ。」というさげび声。びつくりしてふりむくと、いままでそこにいた木村くんのすがたが、きえうせていました。

小林くんはびつくりして、そこへかけつけました。すると、ゆかいたに、四かくいあながぽっかりとあいていることがわかりました。ちかしつへのおとしあなです。小林くんが、だんろのぼつちをおしたので、それがひらいたのです。

「木村くん、だいじょうぶか。」

あなの中へ、かいちゅうでんとうをむけてよんでみました。

「う、う、う……だ、だいじょうぶだつ。」

木村くんがくるしそうにこたえました。見ると、あなの下に、すべりだいのようないたが、ずっとつづいています。小林くんは、思いきつてそこへとびおりました。

すうっ……とすべりました。そして、どしんと、ちかしつのかたいゆかに、しりもちをつきました。

やっこのことでおき上がって、かいちゅうでんとうをてらしてみますと、そこは十じょうほどの、ひろいちかしつでした。しかし、ひめいをあげた女の子のすがたは、どこにも見えません。む

こうのかべに、まっくらなほらあながあいています。そのむこうに、べつなちかしつがあるのでしょうか。

「あつ、きみ。あれ、なんだろう。」

木村くんが、おびえた声で、そのほらあなをゆびさしました。

ふたりのかいちゆうでんとうが、ぱつと、そこをてらしました。

まっくらなほらあなのおくで、ぎらぎら光った、二つのまるいものが、ちゆうにういています。そしてそれが、だんだんこちらへ近づいてくるではありませんか。

かいぶつの目です。なにかしらおそろしいものが、こちらへやってくるのです。まるでヤドカリが、かいがらの中からかおを出すように、それが、にゅつとくびを出しました。

「あつ。」

ふたりは、思わず声をたてて、おたがいのからだをだきあいま
した。

そのからだは、まっかでした。まっかな長い、大きなつの。そ
のねもとに、ぶきみなとんがった口。二つのぎらぎら光る目。お
れまがった六本の長い足……。それは、にんげんほどの大きさの、
まっかなカブトムシだったのです。

ああ、ふたりはどうなるのでしょうか。

さつき、ひめいをあげたかわいそうな女の子は、いったいどう
したのでしょうか。

3

小林くんと、だんいんの木村くんが、おばけやしきのせいようかんのちかしつで、にんげんほどもある、大きなまつかなカブトムシに出あいました。

ふたりは、ちかしつのすみで、そのおそろしいかいぶつを見つめていました。かいぶつをてらしている二つのかいちゆうでんとうのわが、ぶるぶるふるえています。

キーツ、キーツと、なんともいえないするどい音がしました。大きなカブトムシのなき声です。そのたびに、あのとんがった口が、ぱくぱくひらくのです。

大きなカブトムシは、長い六本の足を、きみわるく、がくん、がくんとうごかしながら、ちかしつの中をぐるぐると歩きまわりました。

しばらく歩きまわったあとで、いよいよこちらに近づいてきました。カブトムシのせなかは、まっかにてらてらと光っています。ときどき、大きなはねをひらいて、ぶるんとはばたきのようなことをします。そのたびにおそろしい風がおこるのです。もう、二メートルほどに近づいてきました。とび出した大きな目が、ぎよろりと、ふたりをにらんでいます。

いまにもとびかかってくるかと、ふたりは思わずみがまえました。カブトムシは、あと足をまげ、中の足とおしりでちようしを

とつて、ぐうつとたち上がり、まえ足をもがもがやっています。きみわるいおなかが、すぐ目のまえに見えました。あのまえ足でつかみかかってくるにちがいないと、いよいよみをかたくしていきますと……。

ああ、そのとき、じつにおどろくべきことがおこりました。カブトムシのおなかの中に、ぽかんと、四かくいあながあいたのです。四かくいふたのようなものが、下の方へひらいて、そのふたが、すべりだいのように、ゆかにとどいたのです。すると、おなかの中から、なにかもごもごと、うごめき出してきたではありませんか。

おなかの四かくいあなからはい出してきたのは、長さ五十センチ

ちぐらいの、まっかなカブトムシでした。大カブトムシのはらから、中カブトムシが出てきたのです。まさか、子どもを生んだわけではないでしょう。大カブトムシは、プラスチックかなにかでできている作りものかもしれません。そのはらから出てきた中カブトムシも、五十センチもあるので、きつと作りものなものでしょう。

中カブトムシは、ゆかにたれたふたのすべりだいをはいおりて、そのへんをぐるぐると歩きまわりました。

大カブトムシのほうは、そのまま、ごろんとあおむけにひっくりかえって、まるでしがいのようじつとしています。

大きなセミのぬけがらみたいです。

中カブトムシは、ちかしつをぐるぐるまわったあとで、ふたりのまえへ来ると、ぐうつとたち上がりました。大カブトムシとおなじことをするので、また、おなかに、ぽかんとあながあきましました。そして、そこから、こんどは十五センチぐらいの、かわいいカブトムシがはい出してきました。

かわいいといっても、十五センチですから、ほんとうのカブトムシのなんばいもある、からだじゆうまっかなおぼけカブトムシです。中カブトムシのほうは、また、セミのぬけがらのように、ごろんところがつています。

十五センチの小カブトムシは、ちよこちよこことそのへんをはいまわっていました、やがて、ふたりのまえに来ると、またして

もあと足でひよいとたち上がりました。

そして、おなじことをくりかえしたのです。十五センチのカブトムシのおなかに、四センチほどの四かくいあながあいて、そこから、こんどは、ほんものとおなじくらいの大さきのまっかなカブトムシが、ゆかの上ですべり出しました。

ところが、この小さいカブトムシは、十五センチのカブトムシがぬけがらになってころがってしまっても、すこしもうごかないのです。

ゆかにおちたまま、じつとしています。これは、しんでいるのでしょうか。

それにしても、なんてかわいらしく、うつくしいカブトムシな

のでしよう。いままでの大カブトムシとちがって、これは、まっかな色がルビーのようで、からだの中まですきとおっています。かわいらしい二つの目は、まるでダイヤのようにかがやいています。

「あつ。」

木村くんが、びつくりするような声をたてました。そのとき、むこうのほらあなの中から、なにか黒いものはい出してきたからです。

それは、あなから出ると、すつくとたち上がりました。にんげんです。黒いマントをきた、せいようあくまのような、おそろしい人です。

「わははは……。小林くん、ひさしぶりだなあ。わしをわすれたかね。ほら、いつか『おうごんのとら』のとりっこで、ちえくらべをしたまほうはかせだよ。」

小林くんは、思わずまえにすすみ出ました。

「あつ、それじゃ、あのときの……。」

「わははは……。こんどもきみたちは、まんまとわしのけいりやぐにかかったね。」

4

おばけやしきのちかしつにしのびこんだ小林・木村くんのまえ

に、黒いマントをきた、せいようあくまのようなおそろしい人があらわれました。

「わしは、いつか、きみたちしようねんたんていだんと、ちえくらべをしたまほうはかせだよ。じつは、もう一ど、きみたちのちえをためすために、ここへおびきよせたのだ。

このまえは『おうごんのとら』だったが、こんどは、この赤いカブトムシだ。これはルビーでできている。二つの目は、ダイヤモンドだ。わしのだいじなたからものだよ。これをきみたちにおたすから、このまえのようにちえをしぼって、うまくかくしてごらん。わしは、五日のあいだにそれをさがしだして、ぬすんでみせるよ。ぬすまれたら、このちえくらべは、きみたちのまけなの

だ。」

それをきくと、「ああ、あのときのまほうはかせだったのか。」と、やつとあんしんしましたが、でも、まだわからないことがあります。

「きのう、このせいようかんの外がわを、はしごもないのに、するするとのぼっていったのはおじさんだったの。それから、まどからのぞいていた女の子は、どうしたのです。おじさんがいじめていたのでしょうか。」

「うふふふ……。あれは、きみたちを、ここへおびきよせる手なのだよ。木村くんのもうとのミドリちゃんたちが見ているのを知っていて、ふしぎなことをやってみせたのだ。あのときは、こ

のうちのやねから、ほそい、じょうぶな糸のなわばしごがさげてあつて、それをつたつてのぼつたのさ。夕がただだから、とおくからは、その糸が見えなかつたのだよ。

あのときの女の子は、にんぎようだよ。ほら、これをごらん。」
まほうはかせは、マントの下にかくしていた、大きなにんぎようを出してみせました。

「でも、きのうの女の子は、かなしそうなさけび声をたてていたというじやありませんか。」

小林くんがききかえすと、はかせはにやにやわらつて、よこをむきました。

「きやあ。たすけてえ。」

女の子のおそろしいさけび声がきこえました。ふたりはびつくりして、にんぎょうのかおを見ましたが、べつに、口がうごいてるわけでもありません。「ははは……。ふくわじゅつだよ。わしが、口をうごかさないで、女の子の声をまねたのだ。きのうのさけび声は、これだったのだよ。」

このたねあかしをきいて、ふたりは、すっかりあんしんしました。そして、まほうはかせからルビーのカブトムシをうけとると、おぼけやしきを出て、小林くんのうちにかえり、おとうさんやおかあさんやミドリちゃんに、そのことを話しました。それから、ふたりで、明智^{あけち}たんていじむしょへいそぎました。そして、明智先生にも、まほうはかせのことをほうこくするのです。

それからしばらくすると、小林くんがでんわでよびよせた、十人のしようねんたんでいだんいんが、明智たんでいじむしよへあつまつてきました。その中にひとりだけ、女の子がまじっていました。中学一年の宮田ユウ子ちゃんという、ついこのごろなま入りをした、たったひとりのしようじよだんいんです。年のわりにからだが大きく、いかにもかわいい女の子でした。

「あたし、いいこと思いついたわ。そのカブトムシ、あたしのうちへかくすといいわ。」

みんなでそうだんをしているうちに、ユウ子ちゃんが、そんなことをいきました。そして、小林だんちようの耳に口をよせて、なにか、ひそひそとささやくのでした。

つぎつぎとささやきかわして、ユウ子ちゃんの考えがわかると、みんなは手をたたいて、「それがいい、それがいい。」とさんせいしました。

ユウ子ちゃんは、ルビーのカブトムシをポケットに入れ、その上を手でしっかりおさえて、しょうねんたちにおくられてうちへかえりました。ユウ子ちゃんのうちは、せつこうのおきものを作るのがしよばいで、うらに、小さなこうばがあるのです。

ユウ子ちゃんは、そのこうばの中へはいつていきました。こうばには、しょうねんのくびや、ビーナス（めがみ）や、花かごをさげた女の子などのせつこうのおきものが、たくさんならんできます。

すっかりできあがったものもあり、まだできあがらないで、これからつぎあわせるのもあります。ユウ子ちゃんは、このせつこのの中へ、カブトムシをかくそうというのでしようか。

そんなことで、うまくまほうはかせの目をくまますことができるのでしようか。なにか、もつとふかい考えがあるのかもしれない。

ユウ子ちゃんが、せつこののおきもののまん中にしやがんでいきますと、ガラスまどの外に、おそろしいかおがあらわれました。かおじゆうひげにうずまつたきたない男が、そつと、中をのぞいているのです。

このひげの男は、いったいなにものなのでしよう。そして、し

ようねんたちが手をたたいてよろこんだユウ子ちゃんのちえというのは、どんなことだったのでしょうか。

やがて、じつにきみようなことがおこるのです。この、かおじゆうひげにうずまった、えたいの知れない男が、とほうもないことをやりはじめるのです。

5

しようねんたんでいだんのたったひとりのしようじよだんいん、宮田ユウ子ちゃんは、ルビーでできた赤いカブトムシをもって、じぶんのうちのせっこうざいくのこうばには行って、なにかやつ

ていました。すると、そのとき、まどの外から、かおじゆうひげでうずまった、きたない男が、そつとのぞいていたのです。

そのあくる日の夕がた、ユウ子ちゃんのおうちのある渋谷区しゅぶやで、つぎつぎとふしぎなことがおこりました。ある町のがくぶちやさんへもじやもじやあたまの、きたない男がはいつてきて、シヨウウインドーにかぎつてあつた、五、六さいのかわいいしょうねんの、くびだけのせつこうぞうをかつていきました。

男は、みせを出ると、さびしいよちように、はいり、あたりを見まわしてから、紙づつみをといて、せつこうのしょうねんのくびを、いきなりじめんにたたきつけ、こなごなにわつてしましました。

せつかくかったせつこうぞうを、なぜわつたのでしょうか。この男は、気でもちがってしまったのでしょうか。

それから、三十分もすると、その男は、べつの町のびじゅつしようのみせにあらわれました。そして、そこでも、さつきとおなじしようねんのくびのせつこうぞうをかい、また、さびしいよこちようへ来ると、こなみじんにわつてしまいました。また、十分ほどたつたころ、こんどは、おなじ渋谷区のあるおやしきへ、あの男がしのびこんでいきました。

その家のおうせつまにも、おなじせつこうのしようねんのくびがありました。男は、まどからはいりこんでそのくびをぬすみとると、近くのじんじやの森で、またこなごなにこわしてしまいま

した。

「だめだ、はいつていない。あのととき、まだつぎあわされてないせつこうは、この三つだけだったのに……。」

男は、とほうにくれたように、たちつくしていました。そのとき、ふいにうしろから、女の子のわらい声がかきこえてきました。

男が、びっくりしてふりむくと、大きな木のうしろから出てきたのは、ユウ子ちゃんです。

「おじさん、いっぱいくったわね。このちえくらべは、しようねんたんでいだんのかちよ。」

おじさんは、あたしが、せつこうぞうの中へ、赤いカブトムシをかくすのをまどから見ていたのでしよう。ところが、あれは、

かくすように見せかけただけなのよ。ほんとうは、もっとべつのところにかくしてあるのよ。」

ユウ子ちゃんは、そういつて、さもおもしろそうにわらうのでした。

「そうか、うまくやりやがったな。おれは、あれをぬすもうと思つたが、いつもこうばに人がいたので、ぬすみ出すことができなかった。」

しかたがないから、あの三つの子どものくびがはいたつされるのをまっつて、そのさきを一けんずつまわつてこわしてみたが、なんにも出てこなかつた。まんまといっぱいくわされたな。わっは、は、は……。」

男は、べつにおこるようすもなく、大わらいをして、それから、ふつとまじめなかおになりました。

「ところがね、おじようさん。まほうはかせは、もっと上手うわてなんだけ。おれは、はかせのでしで、きみを、ほうぼうひっぱりまわすやくだったのさ。きみが、おれのあとをつけているまに、まほうはかせが、きみのかくした赤いカブトムシを、ちゃんとぬすみ出してしまったのだよ。は、は、は、は……。」

それをきくと、ユウ子ちゃんは、はつとして、まっさおになつてしまいました。

そして、ものもいわず、いきなりどこかへかけだしていくのでした。男は、あとを見おくつて、にやりとわらいました。

ユウ子ちゃんは、バスにのつておうちへかえると、小さなシャベルをもって、うら口の外のはらっぱへいそぎました。

ひざまでかくれる草をかきわけて、はらっぱのまん中まで行くと、目じるしの石をとりかけて、その下をシャベルでほりかえし、かくしておいたブリキカンをとり出しました。

「まあ、よかった。あの人、うそをついたのだけ。」

かんの中には、赤いカブトムシが、ちゃんとはいっていたではありませんか。

「うふ、ふ、ふ、ふ。こんどは、きみのほうでいっぱいくつたね。」

とつぜんうしろから声がして、さっきの男がたっていました。

「まほうはかせが、ぬすみ出したというのはうそさ。まほうはかせは、このわしだよ。あんなことをいって、きみを、ほんののかくしばしよに來させたのさ。さあ、そのカブトムシを出しなさい。」

男は、にゅつと手をつき出しました。

6

ユウ子ちゃんは、まほうはかせにうまくだまされて、赤いカブトムシのかくしばしよを見つけられてしまいました。

そこは、さびしい原っぱですし、あい手はおとなのまほうはか

せ。こちらは、小さい子どもですから、どうすることもできません。とうとう、ルビーのカブトムシを、とりあげられてしまいました。

「さあ、こんどは、きみたちがさがす番だよ。わしが、このカブトムシを、ふしぎなばしよへかくすからね。うまく見つけ出してごらん。」

は、は、は、は……。かわいいそうに、なきべそをかいているね。よしよし、それじゃ、かくしばしよのひみつを、きつと、きみにおしえてあげるよ。まっているがいい。」

まほうはかせは、そういつて、どこかへたちさつてしまいました。

それから三日めの、おひるすぎのことです。ユウ子ちゃんが、うちのにわであそんでいますと、赤いゴムふうせんが、空からふわふわとおちてきました。

どこかの子どもが、ふうせんの糸をはなして、空へとび上がったのが、力が弱くなっておちてきたのでしょうか。

ユウ子ちゃんがそう思つて、赤いふうせんをじつと見ていますと、やがてそれは、すぐ目の前のじめんにおちました。

ふうせんには糸がついていて、その糸のはしに、白いものがくくりつけてあります。ユウ子ちゃんは、なんだろうと思つて、それをひろってしらべてみました。

それは、紙をこまかくおりたたんだものでした。ていねいにの

ばしてみると、その紙には、こんなへんなことが書いてあります。

五月二十五日午後三時二十分、一本スギのてっぺんからはいれ。
おそろしい番人に注意せよ。

まほうはかせ

「あらっ、まほうはかせからの手紙だわ。」

ユウ子ちゃんは、むねがどきどきしてきました。

まほうはかせは、このあいだのやくそくをまもって、ユウ子ちゃんに、カブトムシのかくしばしよをおしえてくれたのかもしれない。

ユウ子ちゃんは、すぐにその紙をもつて、電車に乗ってこうしま麴

町の明智たんでいじむしよをたずね、小林しようねんにそうだと申しました。

「五月二十五日といえば、あさつてだね。あさつて、一本スギのところへ行けばいいんだね。一本スギつて、なんだか聞いたことがあるよ。あつ、そうだ。木村敏夫くんの家のそばの、まほうは

かせのばけものやしきのむこうに、たしか、一本スギってというのがあった。木村くんに、でんわで聞いてみよう。」

でんわをかけますと、やつぱりそこに、一本スギという、高いスギの木があることがわかりました。

そして、五月二十五日午後三時に、小林くんたち五人のだんいんが、一本スギのある原っぱへやって来ました。

五人というのは、小林だんちようとユウ子ちゃんと、木村敏夫くんと、それから、だんいんの中でいちばん力の強い井上いのうえ一郎いちろう郎ろうくんと、野呂のろ一平いつぺいくんでした。一平くんは、ノロちゃんというあだ名で、おくびようものだけでも、すばしこくて、よく気をつく子でした。

「一本スギのてっぺんからはいれって、どういいうみだろう。」

小林くんがくびをかしげていますと、ノロちゃんが、とんきよ
うな声で、

「きつと、てっぺんにあながあいているんだよ。そこからはいる
んだよ。ぼく、のぼってみようか。」

と行って、こしにまきつけていた長いなわをほどき始めました。

ノロちゃんは、木のぼりのめいじんで、きようは、スギの木に
のぼらなければならぬだろうと思って、そのよういをしてきた
のです。

ノロちゃんは、なげなわもじようずでした。その長いなわを、
くるくるとまわして、ぱつとスギの木の高いえだになげかけまし

た。そして、一方のはしを、自分のからだにしばりつけ、一方のはしを、みんなにひっぱってもらうのです。

つなひきみたいに、みんながなわをひっぱると、ノロちゃんはそれを力にして、ふといスギのみきを、するするとのぼっていきましました。

そして、下のえだまでのぼりつけば、あとは、えだからえだへとつたっていけばいいのです。

ノロちゃんは、とうとう、スギの木のとっぺんまでたどりつきましました。

そして、しばらくそのへんをさがしていましたが、

「なんにもないよう。あななんて、どこにもあいていないよう。」

ときけぶ声が、はるかにきこえました。これは、どうしたわけでしょう。

「てっぺんからはいれ。」といったって、あながなければ、はいれないではありませんか。

ノロちゃんは、五分ほども木のとっぺんで、じつとしていましたが、やがて、なにを思ったのか、とんきような声で、

「わかったよう。あれだよ、あれをごらん。」

ときけんで、原っぱの一方をゆびさしてみせるのでした。そこには、たいようの光をうけて、一本スギのかげが、長々とよこたわっていました。

みなさん、ノロちゃんは、いったいなにに気づいたのでしよう

か。

7

こんどは、少年たんでいだが、ルビーのカブトムシをさがす
番ばんでした。

五月二十五日午後三時二十分、一本スギのてっぺんからは
いれ。おそろしい番人に注意せよ。

という手紙のとおりに、小林だんちようとユウ子ちゃん、木村くんと井上くんと、ノロちゃんの五人が、世田谷区の本スギの原っぱへやって来ました。

木のぼりのめいじんのノロちゃんが、高いスギの木のでっぺんへのぼりましたが、はいるあななんて、どこにもありません。ノロちゃんは、しばらく、あたりを見まわしていましたが、なにを思ったのか、原っぱに長くよこたわっているスギの木のかげをゆびさしながら、さけびました。

「あそこだよ。あそこには、入口があるんだよ。」

それを聞くと、小林だんちようも、はつとそこへ気がつきました。

「ああ、そうだ。てっぺんというのは、スギの木のとっぺんのかげのところなんだ。」

ノロちゃんも木からおりるのをまつて、みんなで、スギの木のかげのさきつぽまで行ってみました。

そのへんには、たけの高い草がしげっています。小林くんは、この草の中へふみこんでいつてさがしていましたが、やがて、

「あつ、ここにほらあながある。ここが、入口にちがいないよ。」と、みんなをよびあつめました。それは、さしわたし六十センチ

ぐらいのせまいあなでした。

中はまつくらですから、井上さんと木村くんが、よいのかいちゆうでんとうをつけ、井上くんがさきになって、あなの中へはいこんでいきました。

せまいところは三メートルほどで終り、にわかにあながひろくなつて、下の方へ、石だんがついています。もうたつて歩けるのです。

石だんをおりると、しょうめんには、大きな鉄のとびらがしまっています。まほうはかせの手紙には、「おそろしい番人に注意せよ。」と書いてありました。きつと、そのおそろしいやつが、むびらのむこうにまちかまえているのだらうと思うと、みんな、む

ねがどきどきしてきました。

でも、ここまで来て、ひきかえすわけにはいきません。

井上くんは、とびらのとつてをつかんでおしてみました。

すると、かぎもかけてないらしく、鉄のとびらは、キイツとぶきみな音をたてて、むこうへひらきました。

かいちゆうでんとうで、その中をてらしてみましたが、なんにもありません。ただ、まっくらなほらあなが、ずっとおくの方へつづいているばかりです。

五人は、井上くんをさきにたてて、おずおずとそのくらやみの中へはいっていききました。

おくびようもののノ口ちゃんは、ぶるぶるふるえながら、小林

だんちようについていきました。それに、ユウ子ちゃんは、女の子ですから、まもってやらなければなりません。小林くんは、両手で、ノロちゃんとユウ子ちゃんの手をひいて、すすんでいきます。すこし行くと、ほらあなのまがりかどへ来ました。

そこをひよいとまがると、みんなは「あつ。」といったまま、たちすくんでしまいました。すぐ目の前に、とほうもなく大きなばけものがうずくまっていたからです。そのかおはきいろで、まつ黒なふといしまがついていました。せんめんきほどの大きな目が、やみの中で光っていました。

ステツキをたばにしたような、ふといひげのはえた大きな口、その口から二本の白いきばが、にゅつとつき出ています。トラを

百ばいも大きくしたようなばけものです。そのおそろしいかおが、ほらあないっぱいになって、あごが、じめんについているのです。

どこからか、なまぐさい、強い風がふきつけてきました。

「うへへへへ……。かわいい子どもたちが来たな。おいしそうなごちそうだ。いま、たべてやるからな。うへへへへ……。」

おばけのトラが、そんなことをいって、ぶきみにわらいました。その声が、ほらあなにこだまして、なんともいえないおそろしさです。

そして、おばけは、二メートルもあるような大きな口をがっつひらきました。

五人は、にげようとしても、じしやくでひきつけられたように、

どうしてもにげることができません。そして、いつのまにか、おばけのトラの口の前まですいよせられ、つぎつぎと、口の中へおまれてしまいました。

口の中には、まっかな大きなすがうごめいていました。

五人は、そのしたの上にくろがったまま、気をうしなつたようになつていました。

それにしても、地のそこに、どうしてこんな大きなばけものか、すんでいるのでしょうか。ばけものにたべられた子どもたちは、これから、いったいどうなるのでしょうか。

小林さんと木村さんと、ユウ子ちゃんと井上さんと、ノロちゃん
の五人は、ルビーのカブトムシをとりかえすために、世田谷区
のさびしい原っぱの、ふしぎなほらあなへはいつていきました。

そのほらあなの中には、ふつうのトラの百ばいもある、おばけ
のトラがねそべっていて、大きな口へ、五人をのみこんでしま
いました。

しばらくして気がついてみると、まだ、トラのしたの上のところ
がったままで、いぶくろの方へのみこまれていくようすもありま
せん。井上くんは、しっかりとにぎりしめていたかいちゆうでん
うで、おばけののどのおくをてらしてみました。

すると、このトラののどのおくには、しよくどうも、いぶくろも、なにもないことがわかりました。

くびだけのトラだったのです。もちろん、いきたトラではなくて、きかいじかけの作り物です。すいよせられたと思っただのは、どこかうしろの方から、大きなせんぷうきのようなもので、ふきつけられたのでしよう。

井上くんは、トラの口から外へ出ようと思いました。もう口はとじられていて、どうしてもあけることができません。

しかたがないので、小林くんとそうだんして、おくの方へ行つてみることにしました。トラののどのおくは、いままでとおなじコンクリートのほらあなです。かいちゆうでんとうでてらしなが

ら、そこをすすんでいきますと、ばったり行きどまりになってしまいました。

「あつ、ここにドアがあるよ。」

ひとり、やっとおれるほどの小さいドアです。井上くんが、そのドアのとっ手をつかんでひっぱると、なんなくあきました。まるで、きんこのとびらのように、ひどくぶあつい、がんじょうな鉄のドアです。

五人は、その中へはいりました。すると、ふしぎなことに、そのおもいドアが、すうっと、ひとりでにしまってしまったではありませんか。

井上くんはおどろいて、もう一どあけようと思いました。こん

どは、いくらおしてもびくともしません。それにドアのうちがわには、とっ手もなにもなく、すべすべした鉄のいたです。

「おやつ。ここは、どこにも出口のないまるいへやだよ。」

それは、たたみ二じょうくらいの、いどのそのようなまるいへやでした。

五人は、コンクリートのつつの中にとじこめられてしまったのです。かいちゆうでんとうでんじようをてらしてみると、まるいつつは、ずっと上の方へつづいています。まったくいどのそことおなじです。

「おや、あの音はなんだろう。」ノロちゃんが、おびえた声を出しました。

ほんとうに、へんな音がしています。とおくで、モーターがまわっているような音です。

そのとき、かいちゆうでんとうでてんじようをてらしていた井上くんが、

「あつ、たいへんだつ。」

ときけんだので、みんなびつくりして、その方を見上げました。

じつにおそろしいことが、おこっていたのです。ごらんなさい。てんじようから、鉄のふたのようなものが、じりじりとおりてくるではありませんか。

まるいつつのうちがわへ、ぴったりはまったあつい鉄のふたです。それが、しずかにおりてくるのです。

鉄のふたは、モーターの力で、すこしのくるいもなくおりてきます。ああ、もう手をのばせばとどくところまでおりてきました。「みんな、手をのばして、力をあわせて、あれをささえるんだ。でないと、ぼくたち、おしつぶされてしまうよ。」

小林くんはそういつて、まず、自分が両手を上げました。

みんなも、そのまねをして、両手を上げて、鉄のふたをおしもどそうとしました。しかし、それは、ひじょうにおもい鉄のかたまりらしく、五人の力では、とてもささえきれません。じりじり、じりじりと、おりてくるのです。それにつれて、ささえている手が、だんだんさがり、とうとう鉄のふたは、みんなのあたまにくつつくほどになりました。

もう、しゃがむほかはありません。そのつぎには、すわってしまいました。それでもまだ、鉄のふたはおりてくるのです。もう、すわっていることもできないようになり、みんなはあおむけにねころんで、両手と両足でささえようとなりましたが、やっぱりだめです。なん百キロというおもさの鉄が、ねているかおのすぐそばまでおりてきました。

ユウ子ちゃんは、なきだしました。ノロちゃんもなきだしました。

「たすけてくれえ……。」

井上くと木村くんが、かなしい声でさげびました。小林くんさえ、なきだしたくなるほどでした。

ああ、五人は、いったいどうなるのでしょうか。

9

少年たんていだんの小林だんちようと、だんいんの木村さんと、ユウ子ちゃん、井上さんと、ノロちゃんの五人が、まほうはかせのあんごうをといて、世田谷区のはずれのさびしい原っぱにあるほらあなへはいつていくと、コンクリートのまるいへやにとじこめられ、上からおもい鉄のふたが、じりじりとさがつてきました。鉄のふたにはすきまがないから、そのままさがつてきたらたいていへんです。

みんな、おしつぶされてしんでしまうにきまつているのです。おくびようもののノロちゃんや、女の子のユウ子ちゃんは、わあわあとなきだしてしまいました。

しかし、だんちようの小林くんは、しっかりしていました。いそがしくあたまをはたらかせて、どうしたらみんながたすかるかということをし、いっしょうけんめいに考えました。

「まほうはかせは、人ごろしなんかするはずがない。こんなおそろしい目にあわせて、ぼくたちのゆうきとちえをためしているんだ。」

それなら、ちえをはたらかせたら、どこかににげ道があるのかもしれません。

そこで小林くんは、かいちゆうでんとうをもったまま、まるいへやのまわりを、ぐるっとはいまわり、コンクリートのかべをしらべてみました。

すると、コンクリートのかべに、六十センチ四方ほどの、四かくな切れ目がついているのを見つけました。

「これが、ひみつのかくし戸かもしれないぞつ。」
力いっぱいおしてみましたが、びくともしません。

「どこかに、これをひらくしかけがあるにちがない。」
小林くんはすばやく、そのへんを見まわしました。

四かくな切れ目から、すこしはなれたかべの上の方に、コンクリートが小さくふくらんだところがあります。よくしらべてみる

と、そのぼっちは、コンクリート色にぬった金物かなものであることがわかりました。

「ああ、そうだ。鉄のふたが下までおりたら、ぼくたちがしんでしまうから、下までおりないうちに、にげ出せるしかけになっているのだ。」

「鉄のふたが、このぼっちのところをとおると、ぼっちがおされる。そうすると、ひみつの戸が外へひらくようになっていのだ。」

小林くんは、とつさに、そこへ気がつきました。

「それなら、手でおしたつて、ひらくかもしれないぞ。」

そこで、ぼっちにおやゆびをあて、その上に、もう一方の手を

かきねて、力いっぱいおしてみました。

ぼっちは、なかなか動きません。たいへんな力があるのです。

小林くんは、からだじゆう、あせびつしよりになりました。でも、がまんをして、うんうんおしつづけていますと、カタンという音がして、四かくな切れ目が、すうつとむこうへひらきました。小林くんのちえとゆうきが、せいこうしたのです。

そこは、にんげんひとりがやつとはつてとおれるほどのまっくらなあなでした。小林くんは、みんなをよんで、そのあなへはいこみました。きみがわるいけれども、じつとしていたら、鉄のふたにおしつぶされてしまうだけですから、このあなへにげるほかはないのです。

そのまっくらできゆうくつなあなは、十メートルもつづいていました。

やがて、あたりがきゆうにひろくなりました。外へ出たのでし
ようか。いや、そうではありません。まだまっくらです。やはり、
地のその一室なのです。

たち上がって、かいちゆうでんとうでてらしてみますと、それ
は、二十じようもあるような、コンクリートのへやでした。みん
なが、そのへやにはいったとき、どこからか、ぎよつとするよう
な声がひびいてきました。

「わははは……。かんしん、かんしん。とうとう、あぶないところ
をぬけ出したね。だが、まだこれでおしまいじゃないよ。わし

の手紙には、『おそろしい番人に注意せよ。』と書いてあった。だい一は大トラ、だい二は鉄のふた、さて、だい三の番人はなんだろうね。おしまいほどおそろしいやつがひかえているからね。ようじんするがいいよ。』

まほうはかせの声です。どこから聞えてくるのかわかりません。きつとてんじょうのすみに、ラウドスピーカーでもしかけてあるのでしよう。

五人は一かたまりになって、おたがいのからだをだきあつてじつとしていました。ノロちゃんのからだだが、がたがたふるえているのがよくわかります。

「あれっ、なんだろう。なにか動いているよ。」

木村くんが、むこうのゆかをゆびさしてさげびました。かいちゆうでんとうの光が、さつとその方をてらします。

するとそこに、なんだかきみのわるいことがおこっていました。地のそこから、みようなものがむくむくとあらわれてきたのです。

まるいあたまのようなものが出てきました。

それが、見る見る大きくなります。あなもなにもないコンクリートのゆかから、むくむくと上がってくるのです。子どもくらいの大きさになりました。おとなくらいになりました。おとなのばいになりました。おとなの三ばいになりました。大きなあたまの、まつさおなからだの、のっぺらぼうなかいぶつです。それが、き

りもなく大きくなつていくのです。

10

小林くんと、木村くんと、ユウ子ちゃんと、井上くんと、ノロちゃんの五人は、ルビーのカブトムシをとりかえすために、まほうはかせのすみかのちか室へはいつていつて、いろいろなおそろしいめにあいました。ちか室には広いへやがあつて、五人がそこへはいると、へやのまん中に、むくむくとみようなかいぶつがあらわれました。

たまごに目と口をつけたような、おかしなやつです。それが、

見るまにだんだん大きくなり、おとなの三ばいもあるような大にゆうどうになつてしまいました。そして、

「わははははは……。」

と、かみなりのようなわらい声が聞えました。

みんなは、思わずもと来た方へにげだしましたが、せまい入口にはいこもうとして、ふと、うしろを見ますと、おやつ、あのかいぶつは、どこへ行つたのか、かげも形もなくなっていました。かいちゆうでんとうでよくしらべてみましたが、へやは、まったくからっぽで、なにもないのです。

四方のかべはかたいコンクリートで、どこにも出口はありません。

みんなは、いよいよよきみがわるくなってきました。

「へんだなあ。あいつ、けむりのようにきえてしまったよ。」

ノロちゃん、とんきような声でいいました。

「あつ、ごらん。なんだか、動いてる。」

またしても、じめんから、ぶきみなものがわき出してきました。まつさおなものです。それが、かおからかた・はら・こしとせり出して、おとなぐらいの大きさになりました。

「あつ、せいどうのまじんだ。」

小林くんがさげびました。ずっと前に、少年たんでいだんがたかかった、あのおそろしい、せいどうのまじんと、そっくりなのです。

せいどうでできたような、青いやつです。耳までさけた口で、にやにやわらっています。それが見る見る大きくなって、やつぱりおとなの三ばいほどになりました。あたまがてんじょうにつかえています。

「ギリリリリ、ギリリリリ……。」

はぐるまの音がします。せいどうのまじんの中に、はぐるまがしかけてあるのでしょうか。

「わはははは……。ちんぴらども、よく来たな。きみたちのさがしていた赤いカブトムシは、このわしが持っている。ほら、ここにあるよ。」

まつさおなきよじんは、おそろしい声でそういうと、耳までさ

けた口をぱっくりあけました。

三日月がたの、まっ黒なほらあなのような口です。

その口から、ペロペロと赤いしたを出しました。そのしたの上に、まっかなカブトムシが乗っているではありませんか。

せいどうのまじんは、口の中に、ルビーのカブトムシをかくしていたのです。少年たちはそれを見ると、思わず、「あつ。」とさげびました。しかし、あい手はおそろしいかいぶつです。とりかえすことは、とてもできそうにありません。

「わははは……。これがほしくないのかね。おくびようなちんぴらどもだな。くやしかったら、わしのかおまでのぼってきてみる。そして、わしの口の中から、これをとり出せばいいのだ。わはは

はは……。そのゆうきが、きみたちにあるかね。」

せいどうのまじんは、少年たちをばかにしたように、大きなからだをゆすつてわらうのでした。

「ちくしょう。みんな来たまえ。」

おとうさんから、けんどうをならっている、井上一郎くんはそうさけぶと、いきなり、かいぶつの右の足にしがみついていきました。

あいては、おとなの三ばいもあるきよじんです。まるでこれは、すもうとりの足に赤んぼうがしがみついているようです。

そのとき、ガラガラガラツという、おそろしい音がして、あたりが、ぽつと明るくなりました。やみになれたみんなの目には、

まぶしくて、目をあけていられないほどの明るさです。

いったい、なにごとが起つたのでしょうか。やっと目を開いてみますと、ふしぎふしぎ、ちか室のてんじょうがなくなっているではありませんか。

てんじょうがきかいじかけで、両方へ開くようになっていたのです。上には、青空が見えています。たいようの光が、さんさんとあたりにかがやいています。

「あつ、たいへんだ。井上くんが……。」

小林くんが、びっくりしてさけびました。ほんとうに、たいへんなことが起つていたので。

ごらんなさい。せいどうのままじんのからだだが、すうつとちゆう

にういたかと思うと、そのまま、ふわふわ空へまい上がって
います。足にしがみついた井上くんも、いっしょにつれたままです。

これも、まほうはかせのまほうででしょうか。

それにしても、これから、いつたいどんなことが起るのでし
ょう。

二

ちか室のてんじょうが大きく開いて、おとなの三ばいもあるせ
いどうのまじんが、ふわふわとちゆうにうき、そのまま空の方へ
まい上がっていききました。

まじんの足にしがみついていた井上一郎くんも、いつしよに、空へまい上がっていくのです。

「おうい、井上君、手をはなせよ。そして、下へとびおりるんだつ。」

下から、小林くんが、大声でさげびました。

まじんの足は、ちか室のゆかから、もう三メートルもうき上がっていましたが、井上くんは思い切って手をはなし、ぱつととびおりました。

そして、コンクリートのゆかにしりもちをついて、かおをしかめています。

「あいつ、赤いカブトムシを口に入れたまま、とんでいってしま

ったよ。早く追っかけなけりやあ。」

「よしつ。なわばしごだつ。」

小林くんはそうさげぶと、おなかのシャツの下にまきつけていた、じょうぶなきぬひものなわばしごをするするとほどいて、その一方のはしについている鉄のかぎを、開いたてんじようへ投げ上げました。

なん度もしくじったあとで、やっとそのかぎが、てんじようのあなのふちにひっかかったのです。

しようねんたんていだんのなわばしごは、一本のきぬひもです。それに三十センチごとに大きなむすび玉がついていて、そこへ足のゆびをかけてのぼるのです。

「じゃあ、ぼくがさききのぼるから、みんな、あとから来るんだよ。」

小林くんはそういつて、きぬひものなわばしごをぐんぐんのぼつていくのでした。

そのあとから、みんなのぼりました。ユウ子ちゃんは女の子ですから、井上くんたちが上から手をのばして、引き上げてあげました。

あなの外へ出ると、そこは、草ぼうぼうの原っぱでした。さいしよにのぼった小林くんが、むこうへ走つていくすがたが小さく見えます。いったい、どこへ行こうとするのでしょうか。

空を見上げると、せいどうのまじんは、ふうせんのように、高

く高くとんでいきます。

「わあ、よくとぶねえ。もう、あんなに小さくなっちゃった。」
ノロちゃんがさけびました。

あとでわかったのですが、せいどうのまじんはあついビニール
できていて、中にかるいガスを入れたものでした。つまり、ふ
うせんだったのです。

ちか室のゆかに小さなあながあいていて、その下に、また、小
べやがあつたのです。そこにまほうはかせがかくれていて、あな
からビニールのまじんをゆかの上におし出しながら、ポンプでガ
スをふきこんだのです。

ガスがはいるにしたがつて、ビニールのまじんはふくれあがり、

しまいには、おとなの三ばいもあるきよじんになってしまったのでした。

せいどうのまじんがものをいったのは、ゆかのあなの下から、まほうはかせが、声をかえてしゃべっていたのです。

まじんが口を開いたのは、あごに細い糸がついていて、それの下からひっぱると口があき、糸をはなすと、口がしまるようになっていたのです。赤いカブトムシは、したにくくりつけてあったのでしよう。

まじんが出る前にあらわれた、たまごのおばけみたいなものも、やっぱりビニールできていて、一度ガスを入れてふくらまし、みんながにげ出している間に、きゆうにそのガスをぬいたので、

ビニールはぺちやんこになり、ゆかのあなの下へかくれてしまったのです。

ちか室が暗いので、小林くんたちは、その小さなあなのしかけがよく見えなかったのです。

空のせいどうのまじんは、だんだんすがたを小さくしながら、東の方へとんでいきます。東の方へ風がふいているのでしよう。まじんは、赤いカブトムシを口に入れたまま、その風に送られて、どことも知れずとびさつていきます。

「あつ、もう、見えなくなってしまった。」
木村くんがさげびました。

そのとき、原っぱのむこうから、小林くんがかけもどってくる

のが見ええました。

「小林さあん、どこへ行ってたの。あいつは、赤いカブトムシを口に入れたまま空へのぼって、もう、見えなくなっちゃったよ。」

井上くんがよびかけますと、みんなのそばへかけよってきた小林くんが、いきをはずませて答えました。

「明智先生に、でんわをかけたんだよ。」

明智先生に、せいどうのまじんのことを知らせたらね、先生は、すぐに新聞社へでんわしてから、自動車で、あるところへとんでいってくださったんだよ。そして、いまにむこうの空から、みかたがとんでくるんだよ。」

小林くんが、東京の町の方の空をゆびさしました。いったい、空からなにがやって来るのでしょうか。

三十分あまりも待ったでしょうか。もう夕ぐれ近いむこうの空に、ぽつんと、黒いてんのようなものがあらわれました。

「あつ、来た、来た。あれだよ。」

小林くんがうれしそうにいました。

てんのようなものは、だんだん大きくなって、こちらへ近づいてきます。それは、一台のヘリコプターでした。みなさん、しようねんたんていだんのみかたというのは、このヘリコプターだったのです。

しようねんたんていだんのおうえんにやって来たヘリコプターは、強い風をまき起しながら、原っぱのまん中へちやくりくしました。

「あつ、明智先生だつ。」

小林だんちようがさけんで、その方へかけ出しました。

ヘリコプターの、すきとおったそうじゅう室のとびらが開いて、明智たんていがおりてきました。

めいたんていは、ひこうきでもヘリコプターでも、そうじゅうできるのです。

明智たんていは、小林くんのでんわをきくと、いそいで新聞社とうちあわせ、新聞社のヘリコプターを、自分でそうじゆうして、とんできたのです。

みんなは明智たんていのまわりをとりかこんで、ちか室でおそろしいめにあつたことを、口々に話すのでした。

「よし、それじゃあ、このヘリコプターで、せいどうのまじんを追いかけるんだ。」

明智たんていは、みんなにさしずをしました。

「小林くんと井上くんとふたりだけ、ぼくといっしょに乗りたまえ。それいじようは乗れない。のこつた人は、みんなうちへ帰つて、待っていたまえ。きつと、せいどうのまじんをとらえてみせ

るよ。そして、赤いカブトムシをとりかえしてあげるよ。」

明智たんていと、小林くん・井上くんのふたりがヘリコプターに乗りこみました。

ヘリコプターはまた、おそろしい風を起して、とび上がっていきます。原っぱにのこったノロちゃん、木村くんと、ユウ子ちゃん、手をふって、それを見送りました。

小林くんと井上くんは、はじめてヘリコプターに乗ったのです。うちゅうりょこうにでも出かけるような気持でした。

ヘリコプターは、高い空を、せいどうのまじんがとびさった東の方へ進んでいきます。

ふりむくと西の空は、まっかな夕やけでした。やがて、日がく

れるのです。そのときのように、そうじゅう室には、小がたのサーチライトがそなえつけてあります。

せいどうのまじんは、風にはこばれていったのですから、風のふく方へ追いかければよいのです。こちらには風のほかに、プロペラの力があります。きつと、追いつくことができますでしょう。

やがて、夕やけもきえ、見る見るあたりが暗くなってきました。空にはいちめんに、星がまたたき始めました。ちじようには、いなかの町のでんとうが、これも星のように、ちらほら見えています。上にも星、下にも星、ほんとうにうちゅうりよこうです。

「あつ、先生。あそこに、なんだかとんでいますよ。」

小林くんのさけび声に、ぱつとサーチライトがてんじられまし

た。その光のとどかないほどむこうの空に、なんだか黒っぽいものがふわふわとただよっています。ヘリコプターは、その方へしんろをむけました。

「あつ、やつぱりそうだ。にんげんの形をしている。せいどうのまじんですよ。」

やがてそれが、サーチライトの光の中へはいつてきました。たしかに、せいどうのまじんのふうせんです。

「小林くん、これで、あいつのからだをうつんだ。いまに、あいつのすぐよこを通るからね。そのとき、ドアをすこしあけて、右手を出して、うつんだ。」

明智たんていはそういつて、小林くんにピストルをわたしまし

た。小林くんはたんでいじよしゆですから、ピストルのうちかたは知っています。

明智たんていは、ヘリコプターをうまくそうじゆうして、せいどうのまじんのすぐよこに近づき、そくどをおとしてならんどぶようにしました。小林くんはいわれたとおり、ドアのすきまから手を出して、まじんのからだにピストルをはっしやしました。

すぐ目の前をふわふわとんでいたまじんが、ぐらつとゆれました。ピストルのたまがめいちゆうしたのです。つづいて、二はつ、三ぱつ……。

そのたびに、まじんのふうせんは、ぐらつぐらつとゆれるのです。そして、たまのあなから、シューツと、ガスがぬけていくの

です。

「よしっ。それでいい。こんどはヘリコプターで、あいつをおさえつけるんだ。」

明智たんていは、ヘリコプターをまじんの前にもって行って、そのままぐつとこうどをさげました。

すると、それにおされて、まじんはよこたおしになり、ヘリコプターのそこにびったりくつついてしまいました。

「よしっ。このまま、どこかの原っぱへちやくりくしよう。もう、にがしっこないよ。」

サーチライトを下へむけると、手ごろなばしよを見つけて、たんでいはぐんぐんヘリコプターをさげました。そして、まっ暗な

畑の中へちやくりくしたのです。

三人は、ヘリコプターからとび出しました。そして、かいちゅうでんとうをてらして、きたいの下をのぞきました。ビニールのまじんのふうせんは、ガスがぬけ、ぺっちゃんこになって、そこにひっかかっていたいました。

ひきずり出して口の中をしらべますと、したの上に、赤いルビーのカブトムシが、ちゃんどくつついていたではありませんか。とうとうとりもどすことができたのです。

あくる日、明智たんでいじむしよの小林くんのところへ、でんわがかかってきました。まほうはかせからでした。

「きみたちの勝ちだよ。ルビーは、きみたちのものだ。いろいろ

苦しめてすまなかつたね。だが、あれは、きみたちのちえとゆうきをためすためだったのだよ……。しようねんたんでいさん、おめでとう。明智先生によろしく。」

小林くんはじゆわきをおくと、よこにたつて聞いていた明智先生とかおを見あわせて、にっこりわらうのでした。

青空文庫情報

底本：「新宝島」江戸川乱歩推理文庫、講談社

1988（昭和63）年11月8日第1版発行

初出：「たのしい三年生」講談社

1958（昭和33）年4月～1959（昭和34）年3月

入力：sogo

校正：岡村和彦

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

赤いカブトムシ

江戸川乱歩

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>